The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベルクソンの身体概念と個体性の問題
Author(s)	田中, 悠介
Citation	メタフュシカ. 2011, 42, p. 65-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23319
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベルクソンの身体概念と個体性の問題

田中悠介

0. はじめに

本論はベルクソンの『物質と記憶』における身体 corps と精神 esprit の関係、特に知覚における中心としての身体の役割と記憶の理論において過去と現在をつなぎ合わせるものとしての身体の働きとを分析する。そこから純粋記憶の領域における身体の有用性による個体化という解釈を検討する。知覚の考察において、その中心としての身体という思考がどのように担保されうるのかを問題にし、人格と身体が実在的、必然的な仕方で合致しないことを示す。そして、記憶を生成するものではなく制限するものとしての身体が現働化、個体化の作用を担うことを提示する。

『物質と記憶』において知覚の分析が行われる場面では、現在の身体という地点において現実に知覚に個体的な記憶が重なっている以上、そこで意識が身体のうちに見出されることは経験的に妥当だと言える。しかし、ベルクソンにとって、この合致は必然的な仕方で決定されているとは言えない。精神は身体に条件付けられるようにして現れるが、物質的な身体によっては完全には規定されえない。さらにイマージュ論に従って描かれる世界では身体（あるいはその部分）もイマージュ以上のものではありえないのだから、そこにのみ意識が成立する理由は不明瞭なのではないか、という疑問が起こる。では、知覚に浸透するものとしての記憶は知覚それ自身とどのような関係にあり、精神が物質から「独立している」[1]という時のベルクソンはどのような物質身体と精神との関わりを考えているのか。本論では、『物質と記憶』4 章を視野に入れて、非人称的な純粋記憶の中から個体的な人格を現出させるものとして身体の役割を説明しようと試みる。そこから、ベルクソンの哲学において、物質的身体とは一方で個体の指標として精神を制約するものでありつつ、もう一方で自由の条件ともなるような、縮約の結果である人格、すなわち個別の持続を用意するものとしての二重の作用を持つということが分かる。

身体が精神を条件付けるなかで、精神的なものが身体の功利性の制約から離脱してゆくような働きを持つ、そこに持続の可能性を見るのがベルクソンの哲学である。そのような身体の作用の

---

1 Henri Bergson, *Matière et mémoire* , PUF, 2010,p.198
以下、引用は MM, 項数と表記

意義を知覚や記憶、知性との関係から分析し、また、精神の個体性 individualité を保証するものとして記憶力を考察する中で、個体を可能にするものが運動図式としての記憶（身体の記憶）のあり方の内に見出されるだろう。その結果、身体がその身体的・運動的な記憶力によって現在のうちで過去・記憶を個別的なものへと条件付けていること、そうでありながら精神は身体と実体的に完全には一致することがないとベルクソンが考えていたこと、また、それが進化や社会の議論まで延長されるような身体と精神の概念を形成していることが理解されることになる。

以下、これらの点を検討するためのベルクソンの理論の歩みに従い論をすすめる。

１－1．イマージュと身体

『物質と記憶』はイマージュという概念を持ち出して知覚（純粋知覚[2]）を分析することから始まる。哲学史上の二元論における精神と身体の区別という問題に対して、ベルクソンは実在論にも観念論にも組みせず、全てのものをイマージュとして思考することで答える。ここで、イマージュの総体とは物質界として捉えられ、そこには脳も身体も含まれる。それは一般的な物理法則で捉えられるような作用と反作用の関係の総体でもある。その中で身体は常に知覚の中心にあるものとして特殊なイマージュとみなされる[3]。すなわち知覚とは身体が運動のため利害 intérêt、有用性 utilité に応じた範囲のイマージュを区切ったものと定義される。知覚とは「諸イマージュが、その内のただひとつのイマージュにだけ結び付けられ、それを中心として相異なる緒平面の上に並べられ、この中心的なイマージュの僅かな変化で諸イマージュの全体が変貌するような体系」[4]であり、私にとっての身体が諸イマージュの中でただひとつの特権的なイマージュなのである。

諸イマージュの全体が最初に与えられれば、「私の身体は必然的に」イマージュの全体の中において「一つの事物として描かれるに至る」[5]、と『物質と記憶』の 1 章においてベルクソンは述べ、さらに「私の身体というイマージュは不変である」ために身体というイマージュを「中心にしなければならない」[6]と続ける。ここでは、すでに存在し、身体と重なり合うような判断や感覚の主体を主語に立てること、つまり意識を現在において経験的な前提として自明のものと見なすことにも躊躇はなされないように見える。この点で、ベルクソンの記述に素朴なスピリチュアリズムに見える部分が存在することは否定できない。しかし、ここからベルクソンが主体の発生、あるいは記憶の定位について無自覚であることは結論されない。われわれの表象が「当初は非人格的なもの」であり、われわれが「自分の身体を中心として採用」し、「自分の表象となる」[7]のは反省し、そして観察・思考することによってであると、ベルクソンは指摘している。身体に記憶を重ねることは、経験的事実の観察から始めるという記述のプロセスをとったことの結果であり、

2　純粋知覚とは現実の事実的な知覚から記憶の作用を排した瞬間的な知覚、現実には見出されない権利上の概念として提出される

3　イマージュ世界における絶対的な特権性ではなく、あくまで私の意識から見た特別性である

4　MM,22

5　MM,46

6　MM,46

7　MM,45

彼が身体の特別性を発生論的に原初的なものとみなしているわけではない。

そして知覚、意識における身体の中心性を認めるならば、次に必要とされる説明は身体という（私にとって）中心的なイマージュがどのような原理で現実の知覚を成立させているか、ということになる。原則として諸イマージュ間の関係は「空間の本質的な特徴」としての「連続性」[8]を持つ。したがって、例えば、身体と机も、同じイマージュであり、そこにはイマージュとしての連続的な関係を見出すことができる。なぜある範囲（身体に従った）での囲い込みが起こり、結果として個人的な知覚が生じているのか、という点についてのベルクソンの説明は、行動に有益な範囲に存在するイマージュのみが知覚の素材となり得るから、というものである。つまり「私はイマージュの総体を物質と呼ぶが、これら同じイマージュが、ある特定のイマージュ、すなわち私の身体の可能的な作用と関係付けられた場合には、それらを物質についての知覚と呼ぶ」[9]のである。ベルクソンのテーゼは、知覚とは身体的行動のために成立するものであり、同様に神経系も「行動するため」[10] のものであるということである。知覚は「諸事物の総体の中で、それらの事物への私の可能的行動 action possible に関与するもの」[11] を描くのである。そこで可能的行動とは身体によって条件付けられているのであり、更にそれは『物質と記憶』2 章で考察されるように現実には記憶の影響下に選択される。

１－２. 知覚と心身関係

時間と空間の区別と純粋知覚の議論において物質と身体の関係は記述されるが、精神と身体（物質）の関係、あるいは精神をどのように理解すれば、『物質と記憶』の物質世界の定義と適合するかのだろうか。『意識に直接与えられたものについての試論』（以下、『試論』）に見られるような素朴な精神の実在という前提は知覚の分析においても共有されているとも思われる。しかし、『物質と記憶』の第 3 章において、ベルクソンは個体的な精神の発生について語ることの困難に言及し、「どうして記憶が物質に宿るのかはわからない」[12] と言うことになる。純粋知覚の議論だけでは身体の人格との関係を記述できないのである。付言すれば、身体と精神というテーマは『物質と記憶』の枠組みを超えて再考されるべきものである。ベルクソンは進化の考察、あるいは機械と精神について論じる『道徳と宗教の二源泉』（以下、『二源泉』）第 4 章において、精神と身体の関係を記述しているが、その解釈のためにも、『物質と記憶』での精神と身体の関係性の正確な記述が要請される。

問題は事実的な、経験的に意識から知覚を導出してみせるプロセスのうちにではなく、なぜ身体が知覚の中心であり、かつ過去と現在をつなぐことで人格が構成されうるのかという理論的な部分にある。

---

8 MM,220
9 MM,17
10 MM,66
11 MM,258-259
12 MM,198

ベルクソンの知覚論、イマージュ論においては物質と身体の間には本質的な差異はない[13]。身体の可能的行動の範囲でイマージュを囲いこんで知覚を成立させ、さらに脳にある作用に対して複数の経路の中から応答（反作用）を選択する能力を帰しても、それだけでは身体に対して精神的なもの（記憶）が浸透することの理由には足りない。空間は本性的には連続性を持つ（程度の差しかない）のであり、そこで知覚とイマージュの総体とは本質的な部品の違いをもたない。すなわち知覚はイマージュの全体に対する部分として位置づけられる。身体とその可能的な行動の幅に従って知覚の領域が決定されると解される以上、知覚は基本的に身体よりも広い（身体に必然的な仕方では還元され得ないもので、むしろ身体と外的事物との反応それ自身を含む。すなわち身体と精神は本性的、実体的な一致を保証されない）と考えるべきだ。

２－１．記憶の二形態

『物質と記憶』の第 2 章において、第 1 章では純粋知覚の考察のために脇に置かれていた記憶について論じられる。現実には知覚と記憶の関係は「記憶の染み込んでいない知覚は存在しない」[14]といったものであり、知覚と記憶は常に絡み合った形でしか現れない。では、ベルクソンは記憶がどのようにして生じると考えるのか。ここで、記憶の形式は 2 つに分けられる。暗唱を例に取れば、第一の形式の記憶とは、最初は音節を区切って発音していたものが、意識せずに自然にすらすらと文章を諳んじることができる状態へ変化することに見出される。このように自動的な反復を可能とする状態の獲得が運動図式 schème moteur としての記憶と定義される。それとは別に、それぞれの暗唱に伴う時、場所などをともなったイマージュとしての記憶、われわれの日常生活のすべてが記憶されているようなこのあり方が、第二の形式の記憶、イマージュ記憶と呼ばれる。前者の運動図式としての記憶は「極限的には、瞬時の再認なるもの」であり、「いかなる明晰な想起が介入することもなしに、身体だけで可能であるような再認」[15] である。それは習慣を作り上げ、時としてイマージュ記憶にかわるように自動的な反応を固定化し、安定的な機構として働く。この 2 つのうち、ベルクソンにとって第二の、イマージュ記憶こそが真の記憶である。この記憶こそが潜在的な存在としてわれわれの持続を支えるものであり、それを現在の内に任意の水準で浸透させること、すなわち縮約 contraction することがわれわれの主観性を形作っているからである。ここで、イマージュ記憶が既にわれわれの個体的な、固有の記憶として捉えられていることは明白だが、一方で「この記憶は、どんなに細かなこともおろそかにせず、各々の事象、各々の所作にその位置と日付を与えるだろう。有用性または実利的適用の底意を持つことなく、自然な必然性の効果だけで、この記憶は過去を蓄えるだろう」[16] と言われるようにこの記憶力は私（個体）に帰属しないのである。このことの意義については後に検討することにして先へ進む。

---

[13] 実在の連続性を持つ物質空間と知性による空間化（象徴的形象化 figuration symbolique ）された空間は異なるものであり、後者の物質観こそが二元論のような結論を導くと考えられている

[14] MM,30

[15] MM.100

[16] MM,86

２－２. 純粋記憶

続いて、ベルクソンは知覚から切り離された記憶、純粋記憶と名付けたものについて分析する。ここでは、前述のイマージュ記憶が考察の基礎となる。大脳局在説批判から（脳も物質世界の一部であるという想定から）、一つのイマージュにすぎない脳にはイマージュは蓄えられず、そのため、イマージュ記憶としての過去の総体はその頂点が現在と触れているような逆円錐形の潜在的 virtuel な存在としてモデル化される。純粋記憶の理論ではすべての出来事が明確な日付や場所を印され、それ自身において自律的に、即時的に保存され、変化することはない（実際の想起の場面、すなわち現在の知覚に浸透する限りでそのような記憶は同一なままではありえないにせよ）。純粋記憶の性質は第一義に現在において実在的には無力なもの、それのみでは現在と触れることができないものである。純粋記憶としての過去はあくまで潜在的であり、それは現在時で現実化させる身体の作用がなければ、現在と隔てられたものに過ぎない。そこでは、即自的、自律的に全てのものが記憶されているだけであり、そのことは脳のような特定の身体器官に記憶を局限することの否定から導出されている。この記憶の円錐[17] におけるあらゆる水準における現在時への影響の発露、現在の知覚への繰り込みが記憶の縮約と呼ばれる[18]。縮約それ自身は意識の作用と考えられており、それを現在の行動のうちに反映（現働化）させる機構が身体である。すなわち、そのままでは純粋記憶は全体としては主体に属するといえるような、人称的なものではない。そうであるなら、知覚が記憶として積み重なり、即自的な過去となったとしても、その過去が特定の身体を中心として現働化されるその理由は問われる必要がある。個別的に見れば、人格はある水準の強度で現在の内に縮約された記憶として知覚に影響するが、なぜそこで身体を中心として構成された知覚のうちに人格が収縮して重なりあうことができる（すなわち過去と現在が身体の内で意識として一体化できる）のだろうか。

純粋記憶の総体とはすべての出来事がそのままに即時的に積み重なっていくことで成立する。そこでは様々な個別持続のリズム（強度）を包摂するような、それゆえ非人称的でしかありえないひとつの持続（宇宙的な持続 la durée de l'univers）の存在が要請される[19]。繰り返しになるが、ベルクソンにとっては習慣化する記憶の形態、運動図式による記憶力は人格や持続と関わる記憶にとって本質的な作用ではない。積み重なる記憶の蓄積のプロセスにおいて、個体化・人称化という概念は制限するものという意味では生命の創造的な働きとは逆向きの流れとさえ言いうる。そのことは『創造的進化』で示される、物質の妨げによって生命の流れから意識が生まれるという記述を考えてみればわかる。すなわち身体の利害による自動化、習慣化という運動機構による記憶も意識の忘却、イマージュ記憶の抑圧に向かうもの、すなわち「われわれの過去は現在の行動の必要性によって抑制されている」[20] のであり、生命の自由の実現という観点から見れば、妨げともなるものだ。それでも、同時に運動図式としての記憶力、運動機構によって作られる記憶

---

17 『物質と記憶』においてこの円錐が個人的なものかどうか、明確に言うことは困難である

18 記憶の円錐について Jean Hyppolite,*Figures de la pensée philosophique*,PUF,1971 を参照

19 ベルクソンがこの概念を本格的に展開するのは『創造的進化』においてである。

20 MM,171

が存在することをベルクソンは認めているのである。ここで、2 つの記憶の区別はこれまでに考えられてきた図式的な区別を超えて重要なものであると考えなければならない。

ベルクソンは人称化の力能を明確に指定してはいないが、記憶の本質的な機能を分けるということは、全体の持続や記憶の総体へ向かう運動を現働化の条件と切り離して保持することを意味していると考えることも可能であろう。そこでは記憶の現働化が個別の人格の縮約の条件となりつつ、さらにより大きな一つの持続へと開いていくことを可能にする方向性が見出される。

『試論』において自我や人格といった概念は自由を可能にするために立ち返るべき経験の源泉であり、その持続の質的な経験の流れへ合致することが自由の発現として捉えられていた。『物質と記憶』において決定的に異なるのは、本質的に人格の表現としての自由とは程度を許すものであり、それは『試論』のように縮約の程度だけではなく、純粋記憶と身体との関係の程度にも関わると考える点である。

3. 時間と記憶

ベルクソンは『試論』と『物質と記憶』で同じ一つの前提、すなわち時間的な存在・持続としての精神を考えることを認めている。われわれは聴覚や視覚などを統合する何かを現在という位相のなかで持っているわけではない。諸感覚が結びつく土台として身体において、結び合わされた任意の知覚が出現し、同時にそれが記憶の浸透によって時間的な厚みを持つことが出来てようやく精神が現れる。「感覚性質の主観性はまさに、われわれの記憶によって行われる現実的なものの一種の凝縮のうちにとりわけ存している」のであり、記憶は知覚に介入しつつ、瞬間相互を凝縮させて、「知覚における個体的意識の主要な提供物、諸事物についてのわれわれの認識の主観的な側面を構成する」[21] のである。身体は知覚としてイマージュの世界を制限するが、それだけでは精神は生まれない。ベルクソンの純粋知覚の概念は身体や脳に「あくまで物理的な諸特性だけ」[22] しか与えない。ベルクソンの主張が『試論』から正当に延長されていると思わせるものがここにはある。持続することの理解とはドゥルーズが語るように時間の関数として思考することであり[23]、時間的な視点なしに統合するア・プリオリな主体を考える必要はない（「神経系のどこにも意識的中枢は存在しない」[24]）。

精神が「身体から完全に独立している」[25] と述べるときにも、ベルクソンの記述は複雑である。個体的記憶・過去は現在と切り離されて存在しているのだと簡単に断じる訳にはいかない。知覚そのものによって記憶ができているという考え、すなわち記憶が弱まった知覚であるという見方をベルクソンは退け、前述のように記憶は潜在的な存在様式を持つものだと定義する。記憶は自律的な相においては身体に対して独立している。それゆえ、過去はそれ自身では無力であり、一定の刺激に対して現在からの要請があって初めてある種の力を現在に行使しうる。しかし、そこ

---

21 MM,30
22 MM,75
23 Gilles Deleuze,*le bergsonisme*,1966,PUF,p.22
24 MM,66
25 MM,198

では現在と過去は切り離されることはできない。それでも身体の現在時の状態（有用性）に関係する限りで呼び出された過去もまた意識として縮約されれば、『試論』において異質なものの相互浸透と定義されるような持続の特質を持つ。つまり、ある特定のリズムを備えた持続として定立され得る。その意味でも、物理的な身体の状態に持続的な意識は還元されることはできない。意識とは身体の力によって、身体の有用性によって呼び込まれなければ現出し得ないものでありながら、構成されてしまえば縮約の作用によって身体との完全な合致を認めることが不可能となる[26]。アントワーヌ・ミケルが述べるように潜在的な過去と現実的な現在の間には何かしらの「不一致」を見出すことができる[27]。客観的世界と知覚、純粋記憶と主観的記憶はそれぞれ両立的だが、個別の人格全体の表現は世界の部分でありかつ、非還元的でもある。個体的持続は身体の利害に縁どられてなお相互浸透として性質は持ち得るのである。

改めて、現実の知覚の場面を検討すると、感覚作用、イマージュの作用と反作用の体系の中心が身体にあることは確かである。しかし、ベルクソンにとって知覚は、例えば、見るという主体の身体的な行為が外界の対象に向かうことで成立するのではないことは第 1 章の議論から見て取れる。精神が成立した観点から振り返れば、知覚の場面には外部性が常に内部性とほとんど変わらない仕方で包含されているといえる。それでは「知覚が知覚された対象と一致するような非人格的な土台が存続すること、そしてこの土台が外部性そのものである」[28] という時、非人格的な土台からどのように人格的なものが出来上がるのか。過去の先端として現在を定義すること、持続のように時間の厚みを意識の特性とすることは『試論』以来なされている。その観点からならば、個体の人格がどのようにして発生するのかと問われても、現在の物質性のうちに還元されることが不可能な性質を持つものとして、記憶によって生み出されるものだと答えることができる。しかし、これはすでに成立している事実から見た記述であって、人格・個体の持続がどのようにして、なぜ身体に対して一対一の対応関係を築けるのかという点では不十分な答えだろう。

4. 潜在性と個体化

サルトルは、ベルクソンがイマージュ論を採用する以上、その理論においてはすべての物質がいくらかの意識を有しているはずである、と述べているが[29]、このことはある程度は正しい理解だと考えられる[30]。世界が意識の縮約の程度、あるいは強度に従って分節されているならば、知

---

26 図式的に知覚と記憶の論述における同型性（知覚は全体から身体の有用性に従って囲い込まれた部分であり、個人的な記憶も純粋記憶から切り出された部分である）は明白であるように見えて、その内実は異なる。前者においてはイマージュの総体と知覚には質的差異は想定されないのに対して、現働化された個人的な記憶は異質なものの相互浸透というテーゼが縮約の作用として見出されるために、全体に対して還元的な部分であるということはできない。そのような関係を捨象して、知覚とイマージュの総体との構図をアナロジーとして記憶にも適応してしまうことはひとつの誤謬であろう

27 Paul-Antoine Miquel,*Bergson ou l'imagination métaphysique*,2007,Kimé,p.71

28 MM,69

29 Jean-Paul Sartre, *L'Imagination*,PUF,1969,pp.43-44

30 「宇宙は持続する」と述べる『創造的進化』では、植物は意識を持たないのではなく、「眠らせて」いることになる

覚の場面での身体の中心性や人称の出現はその意識の程度（範囲）によって説明されるべきだろう。あくまで純粋記憶の全体は人称的なものを、知覚を前提していないと考えることができてしまうが、そうすると、記憶の逆円錐のモデルは現在という位相、身体という位相をはじめから書き込んだ図式であり、記憶が知覚のうちで力を得る（意識として現働化する）のはどのような構造においてか、ということを説明するものであると考えられる。その前提を受け入れれば、個別的な記憶と個別的な知覚の関係はベルクソンの論理の中で明快な図式化が可能である。では、純粋記憶として、潜在的なものとして、そして何よりも自律的に蓄えられていくものとしての記憶と知覚や精神とはどのような関係を持っているのだろうか。そして純粋記憶の全体、非人称的な記憶の総体から分節化して主体としての人格が生まれるというのは、どのような事態なのだろう。「個体性は決して完全ではない。個体とは何か、そうでないものとは何かを言うのはたいてい困難で時には不可能である。しかし、それでもなお生命は個体性の追求を示していて、自然に切り離された、自然に閉じたシステムの構築を目指す」[31] というのであれば、個体という枠組みは知性の一つの作用の結果（空間的な分割による身体と精神の見かけ上の一致の保持）に近づくように見える。

雑駁に言えば、個体化にも 2 つの様相があり、ベルクソンが実在的だと認めるのはその内の一方だけである。すなわち第一には、身体の有用性というシステムに依存する形での知覚形成があり、それに従って個体の指定が可能となる。ベルクソンはこちらを実在的と見なす。第二のものは『創造的進化』で疑問に付されていることに関わる。それは主体と客体という分節の作用が空間に分割を恣意的に持ち込む知性の作用の結果と考えられるような個体化であり、そこでは前述のような曖昧な区別しかないシステムではなく、内と外、身体と知覚にまつわる物質が 2 つの極として指示される。これは『物質と記憶』で批判される観念論と実在論に共通するところの主体と客体の分節であり、その区分が知性の側に属し、知性的な空間化の所産（実在の連続性の排除）として考えられる。まさに『試論』から続く批判、つまり「内的な連続性から生じる生きた統一性を、われわれはある枠組みの統一性に置き換えるが、この枠組はそれによって統一を維持される諸項と同様に空虚で不活性である」[32] ことの典型例であり、『物質と記憶』で二元論の誤った問題設定の元凶として指摘されることである。身体が知覚との関係において記憶を必要とする場合にも、身体を中心とした知覚はなお外部の物質との連続性との連続性を持つ。それに対して、知性の作用が介入する段階を付け加えてしまえば、その結果、精神と完全に外延が一致する身体という特別な物質が存在するという観念とそれが持ち込む心身問題を余分にも抱え込むことになってしまう。したがって、本論は第一のものを中心的に扱うことになる。

『記憶』においてなされた議論、個別の身体に従って限定されたものとしての知覚、その背景として条件付けるものとしての記憶という枠組みに戻ってみよう。『記憶』で直接的には顧みられない問題、それは個体性に係わる問題であり、生命と物質の関係における持続の強度の差異に係わる問である。そこでは物質自体にある種の作用が見出されると想定しなければ、個体的な記

---

31 Henri Bergson,*L'évolution créatrice*, PUF, 2009,pp.14-15

32 MM.204

憶の生成は理解出来ない。

人格的なもの、個別的な持続という観点をとって考えるとき、知覚と記憶との関わりのうちでそれらが生まれていることは否定すべくもない。しかし、純粋記憶という概念は潜在的なものである以上、全体としての純粋記憶は意識ではない。この説明が個体の持続・人格がどのようにして生まれるのかという点に関して、困難を生むものであることは否定はできない。ここでは、2つの見方ができる。まず、生きられた持続の経験それ自身が過去として積み重なり、相互浸透して一つの実在としての精神を成立させているという考え方。他方で、即自的に全てが保存されていく記憶の中で、現在の身体との相関において切り取られてきた部分としての記憶が人格や自我というものを形作っているとも想定できる。後者では、人格とは確固とした枠組みを持つ存在であると言うよりは部分としてのひとつの観点であるといえるかもしれない。ベルクソンの記述が『物質と記憶』の中で前者から後者へと移っていくのは間違いない。あるいは経験的な意識の分析においては前者の見方を、理論的な背景としては後者の考えを受け入れているといえば良いのだろうか。ベルクソンの記述は最終的に後者の思考が必要となることを指し示す。このことは異質なものの相互浸透であるという個人的な持続の性質を否定するものではない。各々の記憶、人格は質的な新しさを常に更新しているが、それも全体の記憶のうちに発生する部分としての持続という考えと両立しうることなのである。

この『物質と記憶』以降の持続や直観概念の（宇宙の持続や神秘的直観へ至る）拡大を鑑みれば、後者の見方を取り、その地点から個別の持続・人格の発生を語ることは重要であろう。「外部性そのもの」でもある「非人格的な土台」、すなわち知覚するものとされるものが一致する地点こそが純粋記憶によって確保される領野であり、身体それ自身の有用性に従って「結び合わされる」ことで知覚が構成されるのと同様、記憶もまた現働化をもたらす身体の物質性そのものによって規定されている。身体の有用性に従って配置された（現働化された）記憶が人格を生むのであり、身体と関わりながら創造された記憶の集積から持続が生まれるわけではない。ゆえに「意識は諸瞬間をつなげる」ものでしかない。ここで運動図式としての記憶を介してしか現働化できないということは、身体を通してしか個体的な記憶・持続は生まれないと言うことと同義である。

しかし、『物質と記憶』に厳密であろうとするならば、身体に対して記憶の土台となるような能力を見出そうという考え方はベルクソンがまさに避けようとしていたこと、物質的なものに「隠された力[33]」を与えることにほかならないのではないか。物質にそこに現れている以上の別の力を見ることをベルクソンは嫌う。すなわち、あくまで身体の限定する働きは個体化作用そのものとしての捉えられるべきであり、人格を創り上げる素材や力そのものは身体の物質性のもとにはないと考えることが要求される。それでも、個体的なものの生成を純粋記憶のひとつの限定として捉えれば、「隠された力」を導入することなく、身体がその役割と担うといえるのではないか。

[33] MM.30

５－１．身体の記憶

知覚を記憶化すること、すなわち諸瞬間の結合（現在への縮約）が意識の役割だとすると、その背景でつなぐための土台を与えるものとして身体が持つところの行動のための記憶力をとりあげる。

身体の記憶 Mémoire du corps[34]、という言い方はベルクソンにおいて、多義的な響きを持つ。身体の記憶は自動性、習慣化を招き入れるもの、すなわち持続・意識を現在の繰延のような形で覆い隠す、身体の有用性の名のもとに自動性のうちへと意識を消し去ることを意味するもの、として考えられていることはすでに述べた。

議論において決定的に重要な点は、2 つの記憶力の区分において、身体によって習慣化される記憶とは運動図式としての記憶であり、それを背景として現働化されるものは身体それ自身の有用性に従っていることである。つまり、運動図式として身体に立脚して存在する作用が個体的なイマージュ記憶の生成の前提になっていることが想定される、ということになる。これは純粋記憶の理論も含めて考えれば、そのような精神と身体の関係が確定的な、ア・プリオリな結合ではないことも示している。身体を中心とした知覚の要請から呼び起こされ、現在の内に織り込まれる記憶は当然、身体によって限界づけられ、縁どられている。原理的に言えば、そこで記憶と純粋知覚を分かち、同時に身体と精神を峻別するのは時間的なものと空間的なものとの存在の仕方の差異である。

ここで明記しておかなければならないが、ヴォルムスが指摘するようにベルクソンが『物質と記憶』の 4 章で行う議論はそれまでに提出してきた対立する 2 つの事項の差異を取り消すことにあるのではない[35]。したがって、記憶の 2 つの形態ははっきりと区別されるべきであり、それらは異なる方向を向いている。イマージュ記憶こそが人格的と呼びうるものであり、運動図式による記憶は、習慣的なものを説明するために持ちだされたと解することが妥当である。それでも、運動図式による身体の記憶は物質的なものそれ自身が単なる反復ではなく習慣化する作用としての記憶力を持つという点で、その重要さは忘れられるべきではない。最終的に、ベルクソンはすべての存在物を持続の弛緩と緊張の度合いの中に置き、同時に瞬間というものを権利上の概念とする。そこでは、イマージュの総体が時間を要する反応の体系でもある以上、そこから生じる知覚それ自身もまた持続の幅を持たざるをえない。それだけであれば、身体というイマージュもそれに対して外的なイマージュも同じように持続している、という説明で済む。身体の中心性はイマージュの収集の程度の大きさ、引力のようなものとして語れば良いとしても、人格的な記憶や意識はそこに成立しうるのか。現実的にイマージュが時間的な幅の中で存在すれば意識が生まれる、ということで十分だろうか。それでは、人間身体にのみ、このように自由を実現することさえ可能であるような強度の意識が生まれることの理由を発生のレベルで説明できない。前述のように、全てのものが意識でありうるし、緊張と弛緩の程度のグラデーション（強度の差異）で世

---

[34] MM,169. この表現は「運動的記憶 mémoire motrice」MM,90、「活動的記憶 mémoire active」MM,130 等、さまざまに言い換えられて登場する。

[35] Frédéric Worms, *Bergson ou les deux sens de la vie*, PUF, 2004,p.160

界を記述する以上は物質世界のうちに意識の強度の差異を印しづける何かを見出す必要がある。これまで身体について語ってきた意味はそこに何らかの回答を与えることにある。

5－2. 記憶と人格

すなわち、身体の記憶力の働きこそ現働化の最も原初的に想定される枠組みとなっていると考えられる。身体に備わった記憶力が習慣を形作る力を備えているのであれば、第二の記憶も同じ生成の過程を土台としていると考えることができる。人格的なものに関わる記憶も、その前段階として身体の、運動図式としての記憶による個体化の背景を要請しているのだ。

失語症の議論において、ベルクソンは「非人格的行動から最も隔たっている」[36]がゆえに固有名詞が失われるのが最初であると述べているが、忘却の過程が記憶の生成の過程の逆回しと取れるならば、身体的な記憶と人格的な記憶の連続性をここに見出すこともできよう。「身体だけで可能であるような再認」による、記憶力を形作る基礎としての運動機構、身体があり、その意味において「私の宇宙の中心として、私の人格性の物質的基礎」[37]としての身体の意義が存在しているのである。それゆえに「第一の記憶は、動く平面のなかに第二の記憶によって差し込まれた動的先端」でしかなく、また「感覚－運動的諸装置は、無力な、すなわち無意識的な想起に、身体を手に入れ、物質化するための、要するに現在的なものとなるための手段を与える」[38]と語られるのだ。そして、さらに遡及する形で2つの記憶、人格を形作る記憶力も習慣を形作る記憶力を基礎としてもっている、ということが確認されれば、ベルクソンの二元論に対する答えは十全なものとなるだろう。習慣が組織した感覚運動系の全体によって構成される身体の「ほとんど瞬間的な」記憶は過去の真の記憶（イマージュ記憶）の基礎部分（知覚における人格の枠組みを発生させるもの）として役だっていると考えるのである。この限りにおいて2つの記憶は区分の位相を変化させる。身体の記憶力と呼ばれるものは、持続の最低限の厚みをもたらす媒介としての身体の作用を指し示すのである。

これまで見てきたように全てのものを意識の緊張から弛緩の間での程度の差と考える段階では、身体の役割は重要性を増すことになる。全ては潜在的に意識化の可能性を持っており[39]、物質によってある形で表現されたものが個体の持続として意識化されるのだから、われわれの意識と身体の力能とは直接的に関わることになる。「われわれの身体は、一方ではわれわれの身体が受け取る諸感覚、他方ではわれわれの身体が実行することのできる諸運動を伴うもので、まさにわれわれの精神を固定するもの、われわれの精神に錘と均衡を与えているもの」[40]なのである。広大な純粋記憶が現働化する程度、すなわち緊張の大きさは身体が持つ記憶力の作用の程度に比例する。身体は進化の過程で得られた形質であり、その方向は意識をより自由に向かわせること

---

36 MM,134

37 MM,100

38 MM,169

39 石井によれば純粋記憶それ自身が「自らを物質化しようとする傾向を潜ませ」ており、「その傾向を実現するチャンスが到来するのを待ち受けている」のである。石井敏夫『ベルクソンの記憶力理論』理想社（2001）、p.191

40 MM,193

であるという筋書きは『創造的進化』において示される。そこでは意識の広大な流れが物質に阻害されて意識が生まれるという描き方がはっきりと行われている。個体化の作用は記憶の全体、持続の全体に対する限定である点では、『試論』や『物質と記憶』での自由や創造性の議論の中でそれが完全に肯定的に捉えられているということはできない。それでも、『物質と記憶』の結論までを視野に入れれば、『創造的進化』や『二源泉』に見られる身体と精神の関係性がそこにすでに書きこまれていることが見いだせる[41]。

6. 結語

ここまでの議論からベルクソンの身体に対する態度が、表面的には2つ異なるものとして存在するように見える事実を説明し、そこから個体化の作用を引き出すことで、彼の身体概念の実像を包括的に把握することができる。身体は知覚の成立を可能にする限りにおいて精神の基礎となるものである。同時にそこで身体はその利害関係に従って囲まれた知覚の確定された領域を示し、そこに知性が関わることで明確な境界を得た身体の内外の観念が作られる。それが精神の限界を規定し、対自的に意識を制約するものとなる。身体の有用性からの脱却によって自由の程度が拡大されるという記述と、身体が現在のうちに人格を現働化することの意義は両立的であるが、段階を踏んで考える必要がある。身体（物質）は現在に精神が根付くために必要不可欠なものであり、精神を形作るものでもあるが、一度それが形成されれば、精神・人格はより大きな自由、意識の拡大の方へ、身体の有用性を超え出ることが可能になるのである。その意味でベルクソンの哲学には精神を現働化する力を持つ身体と有用性によって知覚を生み出し、精神を条件付ける境界としての身体という見方が同時に存在している[42]。

身体を離れて人間は持続、人格として存在しない。しかし、純粋な記憶それ自身は身体から独立している力能であり、身体の作用によって知覚、精神が成立したとしても、意識化の可能性を備えた潜在的な実在はそれにはとらわれない。身体は自由の実現のためのステップボードであり、精神はその過程で、現実化され、より大きな潜在性の現働化を志向する。身体による習慣化や自動化、有用性についてベルクソンが語るとき、身体とはより大きな自由、あるいは進化の妨げともなりうるものであるが、一方で、身体や脳の機構の複雑さについて述べるとき、それは意識を可能にするための条件となっており、またその意識における自由の一つの段階として捉えられる。物質の力能、現働化作用がどの程度の記憶（創造性の素材）を現実に人格として表せるか、その進展としての身体には生命進化の方向性があるとベルクソンは考えているのだ。

現在のうちに個人的な人格が位置づけられるには身体が必要であり、同時にそれは純粋記憶、全体の持続との関係においては個体というある枠組みへとそれらを制約するものでもある。そこでの身体と精神の関係は不変な合致や完全に確定された輪郭を持つものにはなり得ない。そして、

---

41 「われわれは、われわれの神経系の構成によって、現在の諸印象がそこで適切な諸運動へと引き延ばされていくところの存在である。」MM.104

42 後者はしばしば知性的な等質化の結果として安定したもの、主観と客観の区別のモデルともなるような身体概念と絡み合うことになる。

おそらくそこに『創造的進化』や『二源泉』における個別的・人格的な経験を超え出ることの可能性もあるのだろう。

（たなかゆうすけ　哲学哲学史博士後期課程）

Le conception du corps et le problème de l'individualité dans la philosophie de Bergson

Yusuke Tanaka

Le sujet de cet article est d'examiner la relation entre le corps et l'esprit dans la philosophie de Bergson,surtout dans son deuxième livre *Matière et mémoire*.Nous faisons l'analyse des deux définitions du rôle du corps que Bergson a posé comme le centre de la perception dans le monde des images,ou le dispositif d'actualiser la passé dans le présent. Ce travail nous amènera l'interprétation sur l'individualité née de la force du corps.

Au début du chapitre 2 de *Matière et mémoire* ,Bergson a distingué deux formes de la mémoire,dont l'une est active et motrice, créée par les mécanismes moteurs dans le corps, et l'autre est l'image-souvenir, conservée automatiquement avec sa date,invariable,qui constitue la durée,la personnalité.Pour Bergson,celle-ci est véritablement la fonction de la mémoire.Mais,quant au rapport entre le corps et l'esprit, nous comprenons que la mémoire qui se fait en fonction du corps selon ses intérêts est le soubassement de l'esprit individuel,et le fondement de la personnalité dans la théorie de la mémoire.

Si nous considérons l'apparition de la personnalité individuelle,le concept du corps devrait occuper une place importante dans sa philosophie.Parce que Bergson suppose que le corps met comme condition à la formation de l'esprit au present,suivant les degrés de l'actualisation du passé.Mais à la fois,au contraire,nous pourrons indiquer que l'esprit a toujours a tendance à échapper à cette opération du corps. On peut explique ainsi suffisamment l' individuation dans *Matière et mémoire*.

「キーワード」
身体、精神、持続、個体